

第185号

平成17年2月

E-mail: © 2005

shimz@mb.infoweb.ne.jp

LDG04167@nifty.ne.jp

# SCだより

編集 発行 人

清水 吉男

(株)システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

TEL/FAX 045-933-0379



50回め



### MENU

- 特製ブレンド 380
- レモンティー 350
- 日替りケーキ 300
- ぷるせす 無料

アルコールは置いていません

今年は梅の開花が遅れているようだ。例年だとこの時期には紅梅の方も咲き始めている頃だが、今年はまだ蕾が膨らみ始めたところだ。

2, 3年前と比べて、ソフトウェア企業の勢いが鈍化し始めているのが気にかかる。90年代に入って、「これからはアウトソーシングだ!」という号令に、日本中でソフトウェア企業が丸投げで押し込んだ。そして日本のソフトウェア企業のレベルに不満を感じていたとき、外国のソフトウェア企業が十分に使えると分かれば、今度は「これからはオフショアリングだ!」と叫ぶ。これではいつまで経っても、日本の中に強力なソフトウェア企業は育たない。

そこに、先月会社の部長さんと一緒に計画書の話しを聞いた若いエンジニアが入ってきた。

「おや、1ヶ月ぶりですね」  
 「はい、あっという間に1ヶ月ほど経ってしまいました」  
 といってカウンターの奥に座って、「ブレンドコーヒーを下さい」と言った。  
 私は、カウンターの中から軽く会釈をして準備に取り掛かった。鞆から小さなノートを取り出してカウンターに置いた。このノートは、あの時に盛んにメモをとっていたノートである。  
 「その後、計画書はうまく書けましたか?」  
 ふっと彼は顔を上げて、  
 「計画書ですか?」と反応して、「だいぶ慣れてきました。マスターはリーダーのメモのような感覚で活用すれば良いっておっしゃっていましたので、一通り書いた後は、毎日メモのように使っています」  
 「書いてみた感触は?」  
 「感触ですか? 今までは計画書ってもっと厳かなイメージがあったのですが、メモ感覚で書いているうちに身近な感じがするようになってます」  
 「構成に、何か工夫したのかな?」  
 「マスターは、計画書の構成は、時間軸で順番に埋まっていくように構成するとよい、とおっしゃっていましたので、それまであった標準の計画書の構成を少し入れ替えてみました。今まで上手く書けなかったのは、構成のまずさと、一気に書くこうとしていたのが原因のようです」  
 「構成を変えただけで、うまく書けるようになったの?」  
 「あと変更したのは・・・、そうだ“プロジェクトの狙い”という項目を追加しました。これは私の独断でやっています。構成の順序はSQAの人も納得してくれたので一緒に変更したのですが、“狙い”の方はSQAの人はその効果が良く理解できないということでしたので『プロジェクト標準』に限定してやってみるということにしました」  
 「『プロジェクト標準』ね、いい対応だね」  
 「そうか、もしかすると“狙い”を書いたことによって、自分の気持ちがこの計画書に入っているのかも知れませんが、」

「いったい“狙い”に何を書いたの?」  
 という質問を試みたところ、直ぐに、  
 「はい、4つあります。えーと、  
 ・新しい要求仕様の構成や内容を関係者に早い段階で確認し、変更の可能性を低くする。  
 ・サイズによる成果物の連鎖に基づいた進捗管理を行う。  
 ・毎日夕方に、メンバーを回って問題をその日に発見する。  
 ・リスクリストを毎日チェックする。  
 の4つです。お陰で仕様の合意は捗ったし、変更も大幅に減少しました」  
 と答えてきた。完全に“狙い”を暗記していた。おそらく毎日計画書を見て“狙い”を確認しているのだろう。こうなると、計画書を書いたことが生きてくる。

入れたてのコーヒーを彼の前に出して、  
 「どうやら、計画書が毎日を振り返るための“祈りの書”の役を果たしているようだね」  
 「そうですね、事前に割り当てた役割が果たしているかとか、事前に想定していた事態が起きていないかとか、見積りと実績の乖離は正しく反映されたかとか、“問題”が隠されていないか、といったことを毎日振り返ることで、色々なことを早く発見できます」  
 「たとえばどんなことが発見できたかね?」  
 と尋ねられて、コーヒーを一口啜りながら、  
 「そうですね、まず個人の中でもややしていることや、決っていないことが早い段階で見つかりますので、直ぐに手配することで解決できます。それで今のところほとんど遅れにはなっていません」  
 「なるほど、“ウグイスの巡回”というやつをやったんだ」  
 「そうです。計画書の中で、どのようにしてこのプロジェクトを成功させるかということで“狙い”の中で巡回を文字にしたことで、毎日“巡回”できるようになりました」  
 「他には?」  
 「見積りと実績値の乖離を直ぐにフィードバックしながらこの先の作業の見積りを調整していますので、見積りの精度も上がりましたし、実装工程とテスト工程に要員を数名増やす手配もできています」  
 「素晴らしい。でもよく増員が認められたね」  
 「はい、前回この店と一緒にお邪魔した部長が、私が毎日調整している見積りの精度を評価してくれたので増員が認められました」  
 「1ヶ月で、計画書に取り組んだ成果が上がったということだね」  
 「そうかも知れませんが、今回、マスターに勧められて計画書に取り組んでみたのですが、今までの取り組みでは、計画書はある時期に作成して、あとはそれを実行するだけでした。でも今回は、毎日眺めている、毎日調整して、昨日までの見通しに狂いはないかを見ています。今までの計画書の

認識がまったく違っていたということですかね」  
 「たしかに、一般には“書いてお終い”かも知れないね。でも進捗管理に活用できない計画なんて意味ないからね。こうして上手く対応できるようになったのは素晴らしい」

彼は、ほっとした表情を見せながらも、  
 「実は、困ったことが起きているのです」  
 「何だね? 困ったことというのは」  
 「例の部長から、もう一つプロジェクトを見て欲しいと言われているのです」  
 なるほど、この部長さんは計画書の意味を理解したようだ。あの時、ただ者ではないと感じたが、それは間違っただけではなかった。  
 「それで断ったのかね」  
 「断っていませんが迷っているのです」  
 「何を迷っているのかね」  
 「2つのプロジェクトを見るって、そんなこと出来るのだろうか?」  
 「出来るのではないかという思いがどこかにあるから迷っているのだろうか?」  
 と言われて、彼は気がついた。今、彼の頭の中はぐるぐる回っている。確かに、そんなこと出来るっかないと言うのなら即座に断っている。第一、部長がそんなことを言うてくるはずはない。確かに、今まで、プロジェクトを重ねるようなことを言うてきたことはない。

「今回、計画書を書いてみて気付いて事は?」  
 「気付いたこと、ですか?」  
 「そう、今まで考えていた計画書とは、感じが違っているはずだ」  
 「そうですね、前向きになっている感じがします。問題が幾つも見えたときも、まだ大きくなっていませんので、どのように対応するか考えることができます」  
 「今までだったら、どうしている?」  
 「担当者から解決しない問題があることを知らされた時には、日程を遅らせてもらえるように関係する部署に調整に走ったり、機能に制限を付けて貰えるように頼み込んだりしていましたね。これってストレスが溜まる役だね」  
 「それが無くなった?」  
 「問題が大きくなる前に、担当者と一緒に対応策を考えたり、時間的に余裕がある場合は2, 3日様子を見たりしています。その内に対応できてくるのです」  
 「どうやら、あなたは計画書に取り組んだことで、プロジェクトを意図して進めることが出来ることに気付いている」  
 「そうですね、“仕掛けている”という実感があります。このプロジェクトをどうやって仕上げてやるのか?」  
 「計画書は、プロジェクトを成功させるための“仕掛けの書”なんだよ」  
 彼は、“仕掛けの書”という言葉を楽しんでいる。しばらくして、  
 「計画書が無い状態では、火が吹いてからしか動けないのです」  
 「管理職とは、火が吹いてから動くものかと思っているかも知れないね」  
 「分かりました。どうやって2つのプロジェクトを重ねるか、仕掛けを考えてみます」  
 といって、ゆっくりと席を立った。

計画書が書けないというのは、意図して仕掛けることが出来ないということであり、それでは発火してからしか動けない。

# 暁鐘の音

168

## “家庭”が消える？

少子化が進む中で、「家庭」の存在が薄れているように思える。確かに、家には両親と一人の子どもがいる。でも、食事の時以外は自分の部屋に入ったままの子どもが増えているという調査もある。子ども部屋にはテレビもあるし、小学生といえども携帯電話が与えられているので、友達(仲間?)との連絡はいちいち親に知られることもない。少なくとも、同じような境遇にいる友達とはいつでも話が出来る。

「家庭」は、生きる知恵を子どもに伝える場であつたはず。ただし、確実に伝承を維持するには、三世代が存在しないと難しいと思つている。もちろん、時代の変化の中で、伝承するものも変わっていくことはあるが、変わらないものもある。

女性がいさづかりした仕事を持つことは重要な。適切な機会が与えられれば、能力を発揮する可能性が高い。社会の中で重要な役割を果たすことができる女性はいはらずだ。その一方で、企業に於ける賃金が今までのように年功で上がって行かなくなつた。賃金が、年齢よりも職務の種類と成果で決つていくように

なると、どのような職に就くかによつては、夫婦共に働かなければ家庭を維持できなくなる。その代償として家庭の役割が消えていくかもしれない。会社という組織が、父親と母親を家庭から取り上げてしまつと、家庭が本来果たした役割を果せなくなる。働く時間を工夫したりして、家庭を維持する必要性を社会や企業が認めなければ、「家庭」は、次世代を生み出す役割を果せなくなる。公的な扶養機関の教育内容が充実すれば、ある程度はカバーできるかも知れないが、現状では単なる「預かり機関」になつていられると思われ。

本来なら「家庭」が担つていた生きる知恵、社会の一員として存在するための知恵を次の世代に伝える役割をどこでカバーされなければ、二一世紀の日本の社会は大いに混乱することになる。企業もこのことに手を貸さなければ、質の高い労働力を確保できなくなつてしまつし、過去の蓄積を取り崩すだけでは社会も維持できなくなる。

もともと少子化の中では、子どもの居場所は両親の「谷間」ではない。歳の違う兄弟がいれば、その中で対応の仕方もある中で身に付くのだが、「一人っ子」の場合はそれができない。近所の公園で遊んでいると誘拐されかねない。学校も、個々の教室の

中「同世代」の集まりである。クラブ活動に参加するが、別に地域でスポーツ教室にでも通わないかぎり、異なる世代間での接点は持ちにくい状態になつてしまつた。同世代との接触だけでは、生きる知恵を手に入れるのは難しい。

日本では、核家族化の進行の中で、両親が、子どもに生きる知恵を教えなくなつた。いや、両親自身も、親から生きる知恵を教つた記憶が無いのかも知れない。最近、小さい時から子どもの目を見て話をしていないため、目を合わせて話してできないという。子守をテレビに任せてきた副作用だろ。話をしながら直視されると直ぐに目を反らしてしまふ。だから、意志の疎通が捗らない。自分の意志を相手の目を見て言葉で伝えられないため、直ぐに引きこもってしまうのだろ。

学校でも、「教科」を教えているだけで、生きる知恵は教えていない。いや、小中学校では、むしろ教師の方からそのような接点を持つことを避けているように見える。だから、「教科」で落後した子どもは、代わりの生き方を見出せない。仕事の意味や、社会の中で居場所を見つける方法などを教えられなかつた子どもは、ちよつとルールを踏み外しただけで路頭に迷つことになる。

国によつては、教会での日曜礼拝という制度が、「家庭」で出来なくなつた役割をカバーしているのかも知れない。昔の日本では、近所の「お寺」の住職が、その役をしてい

たところがある。檀家という一つの社会の中での精神的支柱の役をしていたし、お寺の庭は、世代の異なる子供たちの遊び場であり、その中で自然と住職の話しを聞く機会もあつた。だが、今日、寺の空き地は駐車場になつたり、マンションが建つたりして、勝手に遊ぶことが出来ない場所になつてしまつた。その前に、生きる知恵を易し

「いかなる種類の闘いといえども、あなた自身の弱体化につながりそうな闘いは、絶対にしてはならない」(マキアヴェリ「マキアヴェリ語録」より引用)

ライブドアとフジテレビが、ニッポン放送株の取得を巡つて激しく闘っている。フジテレビとニッポン放送の株の持ち合いの状態がいびつなことは、何年も前から指摘されてきた。構図の上からは、コクドと西武鉄道の関係と同じである。違いは、コクドの方は非上場企業であるため、他社による買収が出来ないことである。そして資本金のはるか少ないコクドが西武鉄道株の大半を握つているのである。固定株比率をごまかすというミスをしなければ、西武鉄道はコクドの支配下にあり続けたし、そのコクドを支配している堤氏は、誰にも邪魔される心配なく西武鉄道を支配できたのである。

### 今月の一言

子どもたちに話が出来る住職自身がいなくなつたかも知れない。

生きる知恵、世代間を越えた社会の中で自分の居場所を見つめる知恵を、家庭からも学校からも地域社会からも教えられない子どもたちは、どこで身に付けるのだろ。一度消してしまつた家庭の役割を戻せるだろか。

問題に決着を着けようということ、で、「TOB」を公表したところ、ライブドアが市場外取り引きで短期間で大量の株を集めることに成功したことが混乱の発端である。少なくとも、ライブドアの市場外取り引きに、現時点では違法性はないと思われる。今回の両者のやり取りを見ていて想像力の違いを感じさせられた。「放送」という免許の中で守られ、新規参入の危機もない中で長年やって来た人たちの想像力と、放送もデジタル化したことで、インターネットとの融合の可能性を見出して、規制の隙間から時代の扉をこじ開けようとする人たちの想像力の闘いのように見える。

時代の流れは押し戻すことはできないだろ。ただ、ライブドアの既得権益に対する闘い方に一抹の不安を感じる。とは言え、最初に時代の扉をこじ開けるときは、いつもこつなのかも知れない。